
紅夜叉

ひなぎりょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅夜叉

【Nコード】

N6000P

【作者名】

ひなぎりょう

【あらすじ】

どんなに栄えようと、いつかは滅びる。
幸せな時間がいつまでも続くとは限らない。
命ある者必ず終わりが来る。
だから人は足掻くのだろう。
より長くその幸せが続くように。
より長くその夢を見続けられるように。

其の一：紅

赤い・・・・・・・・朱い・・・・・・・・紅い・・・・・・・・

華月かつぎの左目に映るのは、ただの紅。

眼帯をしている右目の方にも、その紅は入ろうとしてくる。

漆黒の夜空をも焼かんとばかりに燃えさかる炎は、華月の生まれ育った里を飲み込んでいく。

「・・・・・・・・・・？」

脳は目の前で起きている事実を理解しようとしないう。悲しんで泣き叫ぶわけでもなく、地団駄を踏むわけでもなく。華月はただ立ちつくすことしかできない。本当は分かっているはずのことを肯定しようとする自分と、否定しようとする自分とが葛藤して止まない。涙さえも出ない。

立ちつくす華月の前に、1人の男が現れた。肩には何かを担いでいる。担がれているそれが何なのか分かったとき、ようやく華月は声を出した。

「砂月なづきを離せ！」

華月がそう言うのと、男は困ったように少しだけ俯うつむいた。その身は黒装束に包まれ、黒い両目だけが見えるようになっていた。目だけでは、誰だかは分からない。

「待って下さい、華月さん。これは・・・・・・・・・・」

「だまれ！ 何で私の名前を知っている！ 誰なんだ、お前！」

男の話を遮った華月の泣きそうな声は、赤黒い空に響き渡る。男は言葉を詰まらせ、苦しそうに目を伏せた。だが、男に向けられた噛みつきそうな華月の目線は、すぐに違う対象に向けられた。それは、見覚えのある姿。忘れてはいない。忘れる訳ない。

「いい。連れて行け」

「は………はい」

男の後ろに現れたのは、栗色の長髪の男。栗色の長髪の男がそう告げると、黒装束の男は足早に炎の先へ消えた。華月は黒装束の男の後を追わない。鋭い視線で、栗色の長髪の男を睨みつけている。

「あんたが、あんたがやったのか！？」

「……………」

男は沈黙している。苦しい、けどどこかに愛おしさを隠しているような目で、華月を見ている。ただ見ている。

「なんで、あんたが？」

「……………」

「答えろお！！」

華月は刀を抜き、怒号と共に男に斬りかかる。だが、男は華月の斬撃を軽く往^いなすと、刀を持っている方の手を押さえた。振り払おうとしても、腕を握る力は強い。

「すまない、華月」

男はそういうと、華月の腹を殴った。華月は苦しそうに目を閉じ、気絶した。男は気絶した華月を抱え

上げ、里から少し離れた山に運び、寝かせる。

「こうするしか……ないんだ」

男はそう零し、華月の横に「紅」の文字が鞘に印された小太刀を置いた。男の零した言葉は、里の燃える音にさえも負けそうなほどか弱かった。その言葉は姿と共に、輝く紅の中に消えていった。

幸せな時が永遠に続くとは限らない。どんなに栄えた者でもいつかは滅びる。命ある者必ず終わりは来る。

夏を生きた油蝉が、紅い炎の中に消えた。

其の二：生い立ち

木の枝を蹴る足は、いつもよりも重たく感じる。袖口についた血は乾き、赤黒く固まっている。その目に捕らえているのは、数多の傷を負った1人の忍者。時折こちらを振り返りながら、必死の形相で駆けている。

呆れた。

雇われてから初めての任務だといっても、簡単すぎじゃないか？ 私はもう松忍だ。これじゃあ役不足だ。けれど、どんなに私にやる気が無かろうと、任務はまだ続いている。この小太刀は血を欲しがる。

今までに幾千もの人の血を喰らってきたこの小太刀の刀身は紅い。小太刀がおさまっていた鞘には「紅」という文字が金の文字で記されている。幾億も人を斬ってきたこの小太刀からは、並々ならぬ覇気を感じる。とても恐ろしい、不気味な覇気。それが「血をよこせ、喰らわせろ」と唸る。

ため息をつき、小太刀を構えた。今までより少しだけ強く枝を蹴り、忍者に斬りかかる。

小太刀が振り下ろされる直前、忍者は振り返り、声を上げた。

「お・・・・・・・・鬼華月っ！」

刀身についた血は、秒も経たないうちに刀身に吸収されてしまった華月の足下に屍が1つ。

静寂に包まれた森の中、華月はその静寂を壊さぬよう、静かに小太刀を鞘におさめた。

* * * * *

「どうだったかい？ 初陣は。あんたにとっちゃあ、少しぬるかっ
たろう？」

「お察しの通り」

元締めは微笑みながら、煙管をふかしている。元締めの正面、あ
ぐらで座る華月の前に、元締めは小判を数枚置いた。

「報酬だよ。受け取りな」

「ありがたく」

華月は小判を懐にしまった。

華月は今、四炉銭湯の最上階、元締めの部屋にいる。

ここは忍びの安楽の地、四炉の里。

四炉の里は、忍者達の自治する里。四炉銭湯に住む元締めの祈行
さんを中心に行っている忍びの集団・紅雀衆が里を警護くしゃくしている。里
の四隅には4つの灯が置かれていて、結界の役割をしている。里の
名前の由来はそこからだろう。

この里の人口の9割は忍びだ。

昔からいる者、嫁いできた者、仕事を探してやってくる流れ者。
行商に来る旅の者、行き場をなくした抜け忍。居る者は様々だが、
どれも善の忍び。紅雀衆1番隊隊長にありながら情報屋をも務める
忍び・保義が、情報を元に里へ来る者を善か悪か判断する。八魔蛇
の様な悪の忍びは、進入どころか近寄ることも許されない。

それに元締めの祈行さんは、元は手練れの忍び。任務で負った足
の怪我が元で、今は里の元締めをしていると聞いているが、戦えな
いとはいっても、祈行さんの畏れはすごい。女忍としての伝説は、
両手の指では足りそうにないほどある。祈行さんの畏れだけでも、
近寄ってくる悪忍の数はかなり抑えられている。

この里が平和で安心できるのは、祈行さんをはじめとする紅雀衆のおかげと言っているのだ。

「あんたが紅雀衆に入った時は、手紙での挨拶だけで、顔合わせでしかなかったからねえ。まあ、今日来てもらったのはそれだけじゃないんだけどねい」

元締めは煙管を置き、華月の目を見た。微笑みは変わらないまま。

「華月ちゃん。あんたの生い立ちを聞きたいんだよ」

「私の生い立ち……ですか？」

「そう。世間ではいきなり出てきた無名の新人・鬼華月で知られてるあんただけで、違うだろう？」

「……………」

「最近の若い奴らにはばれちゃあいねえだろうけど、名を聞けば誰だろうと分かる。あたいらみたいな若年寄なら、その小太刀だけで分かるんさ。人の血を喰らう、禍々しい正義の刃。それに右目の眼帯は烈華の物なんだろう？」

「……………」

「全てを話してはくれないかい？ 今日仲間の契りを結ぶ。だから知りたい。いや、知っておかねばならないと思うんさ。あんたの生い立ち。あんたが見たあの日のこと。知っていること全部ねい」

「……………分かりました」

華月は小太刀を腰帯から抜き、体の前に置いた。

「私は焰華月。（ほむぎのむすめ）紅の里・焰一族13代目当主の嫡女（しやくむすめ）であります」

其の三：あの日

「母は焰一族第13代目頭領・焰烈華。ほむられっか父は四炉の里より参った喜き田利月。だとしつきこの小太刀は、先代より受け継がれし焰一族の証。・・・
・・・あの日は、この小太刀を持ち、任務に出ました」

* * * *

妙な胸騒ぎを感じた。

「本当に持っていていいの？ これって・・・・・・・・」
「いいの、何も言わずに持ってお行き」

華月の言葉を遮って、烈華は言った。この禍々しい紅と記された小太刀は、思っていたよりも重く感じる。小太刀本来の重みなのか、はたまた今まで喰らってきた人々の血の重みなのかは分からないが・・・。

「今日のお前の任務は荷物届けで簡単だけど、道のりは長いから、道中気を付けて。それから、明日の朝まで帰ってくるんじゃないよ」
「え？ どうして？」
「ちよつと嫌な客が来るんでね。お前達を面倒ごとに巻き込みたくはないんだよ」
「母さん・・・・・・・・」

華月が心配そうに烈華を見ると、烈華はニツと笑い、華月の頭を優しく撫でた。

「大丈夫だよ！ あたしが嘘付いたことある？」

「無いよ！」

「だろ？ さ、もうお行き。砂月が門のところで待っているんですよ？」

「うん。……行ってきます」

「おう。行ってらっしゃい！」

烈華は笑顔のまま、ひらひらと手を振った。

烈華の笑顔を見ても、胸にある妙な胸騒ぎは消えない。華月はその胸騒ぎを、この紅い小太刀が放つ禍々しい覇気のせいにした。そうでもしなければ、笑えない。

不安がいつぱいに書いてある顔を烈華に見られぬよう、華月は振り返らずに手を振る。足早に砂月の待つ里の門へ向かった。

「強く……生きて」

華月の背中にそう告げた烈華の顔から笑みは消えていた。やがて、華月の姿は遠く見えなくなった。

「おつせーよ華月！ 遅れるなら遅れるって言うてくれれば、もうちよつと白須んとこの団子買つて来れたのに！」

「なんであんたは任務に団子持つていくのよ」

「腹が減つては、戦は出来ぬ……つて言うだろ？ 腹ごしらえしなきゃ、出来るもんも出来やしねーよ」

「全くあんたは……食い意地だけが取り柄よね」

「う、うつせーよ！」

砂月は私の義弟。私が物心付いたぐらいの時、父さんがこの里に連れてきた。どこかの里の抜け忍の子供で、殺されかけていたところを父さんが助けたらしい。砂月は、命の恩人である父さんのこと

を慕っていたが、その他の者にはなかなか心を開けなかった。そのため、砂月は焰家で引き取るようになった。

砂月の左肩には、どこかの家紋のような刺青があった。それが何なのか、砂月や母さんに聞いてみたこともあったが、話そうとはしなかった。父さんに聞いても、「まだ知らなくても良いことだ」と頑なに言っていた。父さんが長期任務に出ている今では、知る術も無くなってしまった。

砂月の肩には、いつもそれを隠すように包帯が巻かれている。今日もそうだ。

「そういえばさー華月」

「ん？」

「これ、何だと思う？」

「？」

砂月は懷から一本の巻物を出した。

「何？ これ」

「お前、小太刀渡されたんだろ？ 俺は烈華さんからこの巻物を渡されたんだ。中を見ようと思っても、紐が解けねえんだよ。それどころか、この結びくともしない。きっと術で縛られてるんだと思う」

巻物は紅い色をしている。それを縛る紐は黒い色をしている。文字が書かれた形跡はあるが、霞んでいて読むことが出来ない。

だが、気に掛かる。その文字は、「霞んでしまった」と言うより「霞まされた」という方が正しいように感じた。

「母さん、今日は嫌な客が来るからって言ってた。関係があるのは間違いなさそうね」

「ああ。その小太刀も、この巻物も。烈華さんは……いや、

烈華さん達は何か隠してそうだな。」

ちょうどその時、正午を知らせる鐘の音が響いた。

「もうそんな時間……?」

「行こうぜ。そろそろ任務に行かないと怒られちゃう」

華月と砂月は、それぞれの任務に向かった。それが最後に見た里の平和な風景だなんて、知る由もなかった。

「おい、その者止まれ!」

「?」

日が落ちてから、もう随分経った。途中の里で一眠りし、華月は紅の里に帰ろうと道を急いでいた。馬で駆ける華月の前に、数人の忍びが立ちはだかる。夜の闇にとけ込むような漆黒の装束を纏い、腰には刀を差している。

「どいて! 急いでいるの!」

昼間のことがどうも気に掛かり、華月はいてもたってもいられなかった。まだ夜明けまではかなり時間はあるが、帰らなければ。心中を占める胸騒ぎは消えてはいない。

「ここから先は何人たりとも通すなと上より預かっている。どかぬのなら斬るぞ!」

「どかないなら轢くわよ!」

「なっ!?!」

忍びの怒号よりも大きく、華月の馬が鳴く。

「蹴散らせ！ 天風！^{あまかせ}」

「うわあああああ！ 何だこの馬！？」

華月の愛馬・天風は、華月の声で飛び跳ね回り、忍び達を蹴散らした。

「全く……………」

気絶している忍び達をそのままにし、華月は再び駆けだした。

其の四：小太刀

草の生えていない泥の道を、華月は駆ける。辺りはやけに静かだ。天風が地面を蹴る音しか聞こえない。夏を生きる油蝉の声すら、今は聞こえてはこない。天風は休むことなく走る。

漆黒だけで占められているはずの空の片隅に、紅が見えた。西の空が紅い。里の方角だ。

「・・・・・・・・母さん」

無事でいるのか？母さんは？里のみんなは？砂月は？

胸騒ぎは大きな不安へと形を変えた。周りの静けさが、余計に不安を駆り立てる。華月は天風を急がせる。走れ、走れと。

その時、まっすぐな道の先に、またもや人影が見えた。1人の男だ。

「どいてー！」

その男は動こうとはしない。狭い道の真ん中に立ち、こちらを見ている。少し癖毛の金髪が風で揺れている。先ほどの忍びとは違う。黒装束ではなく、小袖を身に纏っている。

「邪魔をしないで！ どいてー！」

「・・・・・・・・」

華月が叫んでも、男はこうとしない。悠然と、まるで華月がくるのを待ちかまえていたかのように立っている。

「くっ・・・・・・・・跳ぶよ、天風！」

華月が男の上を飛び越えようと構えた瞬間、男の目が光る。月の光のようなその目の色は、髪の色と同じだ。すると、どうしたことか天風は何かに怯えたように止まった。まるで蛇に睨まれた兎のように、天風は男を見て怯えている。

華月は天風から降り、男の前に立った。里の紅は、もうすぐそこに見えている。

「焰家の馬は気が強いと聞いていたのですが……案外大人しいものですね」

そついうと男は微笑んだ。綺麗な顔立ちが作り出すその笑みからは、美しさなどよりも恐ろしさを感じた。

「ここになんの用があるの？ どいて！ 急いでいるの！」

華月がそう言うと、男は紅い光の方を見た。

「紅の里へ帰るのですか。もう間に合わないと思いますがね」

「なっ！？」

「私は近江元鉦。おつみ もとかね 此度は、紅の里のあるものを頂戴しに来ました」

「？」

「その腰にある紅の小太刀。そして巻物をいただきに来たのですよ。巻物は持つてはいないようですが……まああの方がどうかしてくださるでしょう」

元鉦と名乗ったその男は、微笑みを変えないまま華月に歩み寄る。

「これは母さんから預かったんだ！ 渡さない！」

華月は烈華から預かった小太刀ではない方の刀を抜いた。男も左腰の刀を抜く。

「やああああ！」

元鉦に斬りかかる。華月は何度も斬りかかる。が、元鉦は余裕なのか、笑みを浮かべたまま華月の繰り出す斬撃を交わす。刀で受け止めようともしない。

これじゃあちが明かない。

華月は元鉦から距離を置き、刀を下に構える。

「焰一刀流・紅水鷄^{べにくいな}」

下から斬り上げ一撃、さらに横に振り十字型の斬撃を加える。斬撃による衝撃波は炎を纏い、元鉦へ向かう。

「ほう。なかなかのですね。ですが……………」

元鉦は、華月の技が届く前に、それを相殺した。

「上には上がいるのです」

刹那、華月の視界から元鉦の姿が消えた。残像さえも残っていない。目でその姿を捕らえるよりも速く、華月の腹に衝撃が走った。

「ぐあつ……………」

一瞬の間に詰め寄られていた。

華月の目に映る世界が段々と霞んでゆく。声を出そうとも、口が微かに動いただけだ。腰帯から小太刀が抜かれた。

元鉦は不気味に笑い、小太刀を持ち、闇の中に消えた。

ああ、里が燃えてゆく。

早く……早く、戻らなければ。母さんが。砂月が。

地面に手を付け、立ち上がろうとする。だが、心とは逆に体は作用する。華月の目の前は真っ暗になった。里を覆う炎の紅も届かない。

どれくらい経っただろう。

華月はようやく体を起こした。まだ里は紅い。月の位置もあまり変わっていない。さほど時間は経ってはいないようだ。

腰帯に小太刀が無いことを確かめ、華月はため息をついた。戻らなければ……。

「天風！」

名を呼んでしばらくすると、天風は走ってきた。遠くには行っていないかったようだ。

天風にまたがり、里へ向かい駆ける。

一匹の油蟬が飛んだ。

赤い、朱い、紅い。

華月の左目に映るのは、ただの紅。

眼帯をしている右目の方にも、その紅は入ろうとしてくる。

漆黒の夜空をも焼かんとばかりに燃えさかる炎は、華月の生まれ育った里を飲み込んでいく。

「………？」

脳は目の前で起きている事実を理解しようとしないう。悲しんで泣き叫ぶわけでもなく、地団駄を踏むわけでもなく。華月はただ立ちつくすことしかできない。本当は分かっているはずのことを肯定しようとする自分と、否定しようとする自分とが葛藤して止まない。涙さえも出ない。

立ちつくす華月の前に、1人の男が現れた。肩には何かを担いでいる。担がれているそれが何なのか分かったとき、ようやく華月は声を出した。

「砂月を離せ！」

華月がそう言うのと、男は困ったように少しだけ俯うつむいた。その身は黒装束に包まれ、黒い両目だけが見えるようになっていた。目だけでは、誰だかは分からない。

「待って下さい、華月さん。これは・・・」

「だまれ！ 何で私の名前を知っている！ 誰なんだ、お前！」

男の話を遮った華月の泣きそうな声は、赤黒い空に響き渡る。男は言葉を詰まらせ、苦しそうに目を伏せた。だが、男に向けられた噛みつきそうな華月の視線は、すぐに違う対象に向けられた。それは、見覚えのある姿。忘れてはいない。忘れる訳ない。

「いい。連れて行け」

「は・・・はい」

男の後ろに現れたのは、栗色の長髪の男。栗色の長髪の男がそう告げると、黒装束の男は足早に炎の先へ消えた。華月は黒装束の男の後を追わない。鋭い視線で、栗色の長髪の男を睨みつけている。

「あんたが、あんたがやったのか!？」
「・・・・・・・・」

男は沈黙している。苦しい、ただどこかに愛おしさを隠しているような目で、華月を見ている。ただ見ている。

「なんで、あんたが？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「答えるお!!」

華月は刀を抜き、怒号と共に男に斬りかかる。だが、男は華月の斬撃を軽く往^いなすと、刀を持っている方の手を押さえた。振り払おうとしても、腕を握る力は強い。

「すまない、華月」

男はそういうと、華月の腹を殴った。華月は苦しそうに目を閉じ、気絶した。男は気絶した華月を抱え上げ、里から少し離れた山に運び、寝かせる。

「こうするしか・・・・・・・・ないんだ」

男はそう零し、華月の横に「紅」の文字が鞘に印された小太刀を置いた。男の零した言葉は、里の燃える音にさえも負けそうなほどか弱かった。その言葉は姿と共に、輝く紅の中に消えていった。

夏を生きた油蝉が、紅い炎の中に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6000p/>

紅夜叉

2011年1月3日20時41分発行